

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02990

研究課題名(和文) 英語を話す意欲を向上させる条件 -日本語使用に焦点を当て-

研究課題名(英文) Factors affecting willingness to communicate in English -Focusing on the use of Japanese-

研究代表者

今野 勝幸 (Konno, Katsuyuki)

龍谷大学・社会学部・講師

研究者番号：00636970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本人英語学習者の会話中のWTCに着目し、1) WTCにはどのような変動が見られるのか、2) その変動にはどのような要因が影響しているのか、という2つの課題に取り組んだ。1点目については、WTCの変動の様相は個人によって大きく異なること、発話するかどうかは、WTCのみならず、不安や熟達度、個人の信念も影響を与える可能性が示唆された。2点目については、会話のトピック、対話者の存在、様々な不安がWTCの変動に影響していることが示された。より積極的なコミュニケーションを引き出すためには、WTCにのみ着目するのではなく、英語力の向上を目指した指導や、より話しやすい環境の整備が欠かせないと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、日本人英語学習者のWTCを高めるための英語指導実践に貢献するものである。まず、WTCの会話中の変動を分析したことにより、会話内でどのような現象が起きた際にWTCが変動しやすいのかを明らかにした。また、変動の理由を細かく分析したことにより、何がWTCを向上、もしくは低下させるのかをある程度把握することができた。これらにより、教室全体に対する指導と学習者個人に対する指導の両面において、WTCを高めるためにはどのタイミングで、どの要因に着目し、どのように対応すればより効果を見込めるかが明確になった。これは、従来の特性的なWTCを扱った研究では、示唆を得るのが難しかったことである。

研究成果の概要(英文)：With special attention paid to Japanese English learners' situated willingness to communicate (WTC) in a conversation, this project attempted to reveal how WTC fluctuated moment-to-moment and what factors were responsible for such fluctuations. As for the first goal, it was discovered that changes in WTC varied drastically from individuals to individuals at each time and that not only WTC, but also anxiety, English proficiency, and learner beliefs had a strong impact on initiation of communication. As for the second goal, three main factors affected situated WTC in a conversation: topics, interlocutors, and various types of anxiety evoked in a specific situation. For learners to actively engage in communication, we educators should provide instructions that help develop linguistic resources and anxiety-free environments so that learners' WTC positively changes.

研究分野：英語教育学

キーワード：WTC 不安 学習者要因 質的分析 会話意欲

### 1. 研究開始当初の背景

日本人英語学習者の会話意欲 (Willingness to communicate; WTC) を高めることは喫緊の課題であり、日本の英語教育が達成すべき究極的な目標であるといえる。英語の授業において、教師が英語を使って指導したり、コミュニケーション活動が取り入れられたりしながら、日本人学習者が教室内で英語を使う機会が増えてきている一方、英語で会話することに消極的になる傾向にあると言われていた。学習者が英語を習得するためには、英語で話すことが必要不可欠であるが、英語で会話するには心理的に準備が整っていきなくてはならない (Khajavy, MacIntyre, & Barabadi, 2018)。すなわち、ある一定水準の WTC が必要である。そのため、どのように日本人英語学習者の WTC を育み、より発展させ、維持していくことができるのかを解明することが英語教育学研究の中でも重要な課題である。このように、WTC は言語習得プロセスの中でも欠かせない要因であることから、最も注目を浴びる研究分野の 1 つであり、多くの研究がなされてきた。その中で程度共通していることは、WTC に影響を与える最も顕著な要因は、自信、不安、国際的志向性の 3 つであったことである。国際的志向性とは、1) 日本語母語話者以外の人と関わりたいかどうか、2) 海外での仕事や活動に興味があるかどうか、3) 海外での出来事に興味があるかどうか、4) 文化的背景が異なる人と友人関係になりたいかどうか、という 4 つの態度から構成される、英語学習動機づけ要因の 1 つである。

しかし、これらの研究から WTC について結論を得るには、次の 2 点において不十分であると本研究は捉えた。1 点目は、当時の WTC 研究の多くが量的研究に主眼を置いていたことである。多くの場合、質問紙でデータが収集され、多変量解析等を用いて WTC と自信や不安を含む他要因との関係性が検証されてきた。この手法は、結果を一般化する過程において非常に重要な役割を果たす一方、それぞれの要因がどのように WTC と関連しているかを明らかにすることは難しい。また、例えば自信が WTC に影響するとして、その自信とはどのようなものか、何によって生み出されているのか、など、詳細を掴むには量的研究は効果的とはいえない。第 2 の問題点としては、実際に英語で会話をしている場面の WTC があまり扱われていなかったことである。質問紙でデータを収集する際、多くの場合において、実際に英語で会話をする場面を想定した質問に答えたものになる。これでは実際の会話をしている最中に WTC がどう作用し、それらに何が影響しているのかなどの詳細な情報を得ることが難しい。そのため、質問紙調査以外の方法で WTC とその関連要因を測定し、分析する必要があった。

これらの問題点を解決するにあたり様々な先行研究を参照したが、次の 2 点を主なものとして挙げる。1 点目の MacIntyre and Legatto (2011) では、6 名のフランス語学習者が 8 つのスピーキングタスクに従事し、その最中の WTC の変動が検証された。その結果、WTC は、タスクの最中、変動し続けていることがわかった。加えて、WTC の変動や、その変動に影響した要因は、学習者によって全く異なるものであったことも明らかとなった。もう 1 つの研究は Kang (2005) である。質問紙で測定される WTC は、学習者の一般的な性向を表す、比較的安定した「特性的」な WTC として考えられている。一方、Kang が研究の対象としたのは「状況的」な WTC で、その時々で様々な要因の影響を受けて変化することを前提としている。4 名の韓国人英語学習者が様々な状況において英語で会話する状況を分析し、状況的な WTC に影響するのは 1) 英語学習者がコミュニケーションを図る際に感じる安心感、2) 英語で話しているときに感じる高揚感、3) 相手に伝えたり、相手を理解したりしなくてはならないという責任感の 3 つであることを明らかにした。これらは更に、話のトピックや相手、会話のコンテキストによって変わることも示された。これらはこの研究は、量的研究とは違った視点をもたらした研究であった。

### 2. 研究の目的

上記のように、学習者の WTC を高めることは、日本の英語教育が達成すべき目標の 1 つであり、どのように WTC を高めるのかを明らかにしていくことは喫緊の課題であるといえる。しかし、先行研究が示したように、WTC は会話の最中にも絶えず変化するものであるとすれば、その変動を捉えた上で、どのような要因が影響してその変化をもたらしているのかを検証し、新たな結果を蓄積していくことで、WTC を高めるための指導実践に繋がる豊富な手がかりを得ることができるようになるだろう。一方、学習者の一般的な傾向を表す特性的な WTC を扱うことを得意とする量的研究では、このような会話の最中の WTC やその影響要因を捉えることは難しい。そのため、WTC に関する量的研究で一般的な、質問紙を用いて大多数の学習者を対象とした研究を主とするよりも、量的な分析も取り入れながら、学習者個人に焦点を当てて研究を進めた。本報告書では、次の研究課題について、2 つの研究の成果を報告する。

研究課題 1 日本人英語学習者の WTC にはどのような変動が見られるのか

研究課題 2 日本人英語学習者の WTC の変動はどのような要因が影響しているのか

### 3. 研究の方法

上記課題に取り組むため、3 つの研究が行われた。研究課題 1 に対応する研究 1 と、研究課題

2に対応する研究 2-1 と 2-2 である。まず、研究 1 と 2-1 では、合わせて 7 名の日本人英語学習者を対象とした。内訳は大学 1 年生が 5 名、大学 3 年生が 2 名である。大学 1 年生は外国語、3 年生は社会学を選考する学生であった。熟達度を確認するテスト等は行わなかったが、TOIEC のスコアの範囲が 350 点から 625 点の学習者である。これらの学習者は、まず、調査開始前に、特性的な WTC、不安、そしてこれまでの英語学習経験に関する項目を含む、Ueki & Takeuchi (2016)を参考に作成された質問紙に回答した。WTC は 8 項目、不安は 6 項目で、すべて 6 件法である。次に、初対面である英語母語話者、もしくは日本人英語話者と 10 分間の英会話を行った。会話の様子は録画され、会話直後に、学習者は自分の会話の様子を見ながら、自身の WTC が上がったと思われる場面と下がったと思われる場面について、+5 から-5 の範囲で評価を行った。評価には、Idiodynamic software (Anion Variable Tester Version 2)を用いた。評価終了後、すぐに結果をグラフ化し、主に WTC の上がり方、もしくは下がり方が特徴的な場面に焦点を当て、必要に応じて映像を再生しながら、学習者にその時の様子や考えていたこと、WTC が上がった理由、または下がった理由等についてインタビューを行った。

研究 1 については、英語母語話者と会話を行った 4 名に焦点を当てて分析を行った。分析に際して、状況的な WTC の現象を捉えるために、会話中に発話した語数に加え、相手の発話に対する反応と自発的な発話を 1 ターンとして見なし、会話終了までのターン総数、そして 1 ターンあたりの発話数を算出した (図 1)。発話数を算出する際、“Umm”や“Ah”などのフィラーは発話として含めず、また、それらのフィラーで 1 ターンが形成されることもあったが、それらもターン数としては計算されなかった。一方、例えば、“Yes.”や“Bitter.”のように意味のある 1 単語で形成されたターンについては、それぞれ、1 発話、1 ターンとして計上した。

研究 2-1 では、インタビューの内容を質的分析の手法に基づいて分析し、会話中の WTC を向上させた要因と低下させた要因を検証した。文字化した後に、それぞれの学習者の応答をコード化し、Kang (2005)が提唱する状況的な WTC に影響する 3 つの要因、トピック、対話者、コンテキストのカテゴリーをもとに分析を進めた。用いられた手法は継続的な比較分析であり、コード間の関係性を繰り返し検討しながら、それぞれのコードのカテゴリ化を進めた。MAXQDA2018 を用いて行われた。

研究 2-2 では、農学系、もしくは理工系を専攻する大学 1 年生 29 名と大学 2 年生 21 名が対象となった。学習者は、調査の内容が説明された後、WTC、不安、自信、楽しさを測定するための 10 段階のリッカート尺度項目 (それぞれ 1 項目) を含む質問紙に回答した。その後、ランダムにペアに割り振られ、それぞれのペアは 2 分間の英会話に従事した。その後、更に 2 回目の質問紙に回答した。この質問紙には 1 回目の質問紙と同様の項目に加えて、その会話中に WTC が変動したら、それぞれどのような理由が考えられるのかを問う自由記述式の項目が加えられた。回答は、2 名によりコード化され、カテゴリー化されたが、そのプロセスの中で不一致がないように確認しながら進められた。その後、1 回目の質問紙から得られた WTC と 2 回目の質問紙の WTC を比較し、会話中に WTC が高まった学習者と低くなった学習者に分け、WTC が上がった理由と下がった理由を分析した。なお、WTC、不安、自信、楽しさの 4 つの変数間の関係性についても分析が行われているが、本報告書では報告しない。

#### 4. 研究成果

研究 1 の対象としたのは、Chiho, Rikako, Momo, Nagi の 4 名で、前者 2 名は外国語専攻、後者 2 名が社会学専攻の学生である。Chiho は 10 年間の英会話学校での学習経験があり、1 日あたり 2 時間程度の学外の英語学習を継続していた。将来は観光業など、英語を使って働く希望を持っていた。一方、Rikako も 5 年間の英会話学校での学習経験があった。また、学外での英語学習時間は週あたり 2 時間程度となるが、週に 3、4 回は所属大学に設置してある英語自律学習施設を利用していた。将来は英語を使った職業に興味があるが、具体的な目標等はなかった。Momo は英会話学校での学習経験はなく、特に学外で英語学習も行っていなかったものの、フランス語やドイツ語は学習していた。一方、週に 2 回、1 時間弱程は英語母語話者との英会話を行っていた。将来は出張等でヨーロッパでの勤務を希望していた。Nagi は、英会話学校での学習経験は無いものの、外国人の家庭教師との学習経験を有しており、また、大学在学中、アメリカに 3 ヶ月の語学留学を経験している。外国人の友だちをたくさん作りたいという目標を持っていた。

これらの学習者の特性的な WTC のプロフィールは、表 1 のとおりである。Rikako は 6 点中 5.75 と最も高く、一般的に英会話には積極的な態度を有していた。一方、Nagi は普段から英会話に不安を感じておらず、Chiho と Rikako は普段、英会話には不安を感じていることが示された。実際の会話中の行動について、興味深い点が 2 点挙げられる。1 点目は不安が最も高く、WTC があまり高いとは言えない Chiho が最も良く発話していることである。2 点目は、熟達度と WTC が最も低いと言える Nagi が、2 番目に多い発話をしていたことである。

表 1  
各学習者のプロフィール

	WTC	不安	発話語数	ターン数	1ターン毎 の発話数	TOEIC
Chiho	4.00	5.17	665	70	9.50	600
Rikako	5.75	5.17	395	54	7.31	430
Momo	3.63	4.50	340	69	4.93	530
Nagi	3.88	2.67	493	71	6.94	430

WTC の変動については、学習者によって大きく異なっていた。Chiho と Nagi は、会話中、頻繁に WTC が高まっていたが、Rikako は上昇することが多かったものの、変化は若干まばらであり、最大値も+4 に留まる。Momo の WTC は、ほぼ 0 のまま推移していた。

これらの変動は、学習者の語りの内容から裏付けられる。Chiho は、例えば、趣味の話をしているときに WTC が高まった理由を、「着物を見るのが好きで、着るのも好きって言って、ほんとに好きなので、まずそこで気持ちがあって。でも…川越を知ってて、その時に、あ、知ってるんだみたいに関感できて、すごいその時に気持ちが上がって。」と述べていた。自分が好きなこと、そして、相手との間に共感が生まれると会話への意欲が高まったと言える。また、Nagi は、4 人の中で最も自発的な発話が多かった。例えば、対話者が “It seems like every season is very beautiful in Kyoto.” との発言に対して “But summer is very hot.” と意見した理由として、「そうですね。途切れさせたくないなっていうほうが大きいです。内容重視っていうよりかは、その人とどれだけ会話を続けられるかっていうほうが考えてしまうかなって感じです。」と答えており、話を途切れさせないことを個人的な目標としていることがわかる。また、「京都の秋の景色はきれいだ」と言いたい場面で、ジェスチャーを交えながら “autumn season... so... very beautiful” を発言した意図として、「伝わるかなと思って、結構、自分的には合っていないっていうのは自分でも分かっているながらも、近い言葉やったら相手を読み取ってくれるかなっていうので」と説明したことから、可能な限り発言しようとする態度を有しており、発話数が多いことの裏付けとなっている。一方、WTC の変動が少なかった Momo は、社会学を専攻する理由を聞かれた際に WTC が低下した理由として、「why っていう質問に基本アレルギーみたいなあります。」と説明している。また、対話者と話題に共通点が見つかった際に WTC が若干上がった理由を、「説明がなくなるから話がしやすいかな、と思いました。」と答えていることから、説明をできるだけ避ける傾向にあり、会話に対して積極的ではなかったことがわかる。

研題 2-1 については、まず、研究 1 に参加した 4 名のデータに、更に 3 名分のデータ (Kasumi, Shogo, Mai) を加えて、Kang (2005) を状況的な WTC に与える影響要因の枠組みをもとに分析を行った。結果は以下の通り、WTC を変化させた要因を、トピック、対話者、コンテキストの 3 つのカテゴリーにまとめられる。

### 1. トピック

WTC を高めた要因として、トピックに関連するものが最も多かった。中でも、WTC を高めた要因としてほとんどの学習者に共通していたものは、「まず自分の趣味を言って、趣味は内容としては自分の中で持っているんで、話せるっていうので。(Nagi)」 「わりと sociology とかやったら、学校のグローバルコモンズとかっていうところで、ネイティブの先生と話すときとかに説明よくしてたから。(Momo)」 と、自分にとって馴染み深い、もしくは自分が話せるだけの知識を持っているトピックに基づき会話をしたことである。一方、自身に話せるだけの知識が乏しく、考えがまとまっていない場合、「この時は、あんまり自分の市について詳しく説明できなくて。しょうゆが好き、有名っていうことは知ってるんですけど、それ、そこしか知らなくて。どうやって説明しようと思って、結構この時はちょっと気分が一瞬だけ落ち込んで。(Chiho)」 や「将来の夢の話自体日本語で聞かれてもあんまり。本当に決まってるから、あんまり言うことがないっていうか。まだ、はっきりとはまだ決まってるっていうか。(Rikako)」 と WTC が低下したことを説明した。これは学習者全員に共通していたと言える。

### 2. 対話者

対話者要因は WTC を低下させた要因としては挙げられなかったが、WTC を高めた要因として、多くの学習者からの言及が得られた。例えば、「やっぱり、自分が言ったことを繰り返して、他の言葉でもいいですし、何かしら自分の言ったことを相手が返してくれると、あ、伝わってるんだなっていう安心感っていうか、不安だったので、すごいこの時はうれしかったです (Chiho)」 のように、相手の反応があることで、安心感から WTC の向上に繋がったと考えられる。

### 3. コンテキスト

コンテキストについては、WTC を高めた要因と低下させた要因の両方が見られたが、主に後者が顕著であったと言える。例えば、「とりあえず災害少ないなと思って言おうと思ったんですけど、災害って発音が出なくて。とにかく、この話題終わったらいいのになと思って。(Momo)」 などように、その場で言いたいことが英語で言えなかった状況が WTC を低下させた要因として挙げられた。また、不安も WTC を低下させた要因として多く挙げられたが、単に、「緊張してるから。(Mai)」 と緊張による不安だけでなく、細分化されていた点が興味深かった。例えば、「これを言って、いいのかなみたいな。これでいいのかなみたいな。(Chiho)」 のように、相手に自分の話の内容をわかって貰えないのではないかと不安に思うことや、「そう、通じるは通じるんですけど何か。その悩んでる時間も相手に申し訳ないって考えて。(Kasumi)」 のように、言うべき単語について悩んでいる際の、WTC を下げた不安も挙げられた。

研究 2-2 では、会話中に WTC が高まった学習者を更に、「会話開始時点で WTC が高かった

グループ (G1)」と「会話開始時点で WTC が低かったグループ (G3)」に分類し、なぜ WTC が高まったのか、その理由の分析を行った。G1 から挙げられた WTC を高めた理由の中で、最も興味深かったのが「義務感」であった。例えば、「会話を続けたいと行けないという使命感」という義務感だけでなく、「相手に迷惑かけないため。」や「テストだから。相手に迷惑をかけないようにするため。」というように、ある種の相手への気遣いという側面も含めた義務感だったことは非常に興味深い。その他にも、「楽しさ (普段話したことのない他の人と英会話での会話という機会が話せることが楽しかったからです。)」が学習者に共通した理由であった。

また、G3 については、最も目立った理由が「達成感」であった。例えば、「英語で会話を続けるのは難しかったが、普段の授業の中で英会話をする機会が沢山あるので、反応や会話の続け方を知った上で会話出来たから。」など、授業中で学んだことを使ってみて、実際に使えたときに WTC が高まったと考えられる。加えて、他者に対する義務感はこのグループにも見られた(「自分は英語が苦手でありテストもいい点ではなかったとの足を引っ張りたくなかったから」)。

以上、上記の研究結果から、会話最中の状況的な WTC は、様々な心理的(不安や達成感など)、言語的(語彙や文法など) 要因や、会話のコンテキスト(トピック、背景知識、聞き手など) などから影響を受け、向上・低下するものであることが判明した。

結論として、研究 1 では、特性的な WTC や不安、熟達度、そして学習経験や将来目標が異なる 4 名の会話中の WTC の変動パターンを分析した結果、MacIntyre and Legatto (2011)らが示したように、様々な要因によって個人の WTC は変化し、そのパターンは大きく異なることがわかった。また、特性的な WTC が高いからと言って必ずしもたくさん英語で話すとは言えず、積極的に話した学習者の特性を見てみると、不安が高い場合には熟達度が高ければ、そして WTC が低い場合でも不安が低ければ、会話中に意欲的になれるなど、様々な要因が相補的に働いている可能性が示された。それだけではなく、会話に対する個人の信念(例えば、「会話を途切れさせたくない」「できるだけ説明をしないで済む方がよい」など)も会話を積極的に行うかどうかに関連していたことがわかった。つまり、WTC とは「意欲・意思」であり、積極的に話すかどうかはその他の要因が複雑に絡みながら決定されることがわかった。少なくとも、今後は WTC を常に一定なものというより、他の要因と関連しながら変動するものと捉える必要がある。

WTC がどのように変動するかは個人によって異なるが、研究 2-1, 2-2 の結果から、学習者間で共通する変動の理由も存在することがわかった。例えば、トピックであるが、自分の知識が及ばないトピックほど、WTC を低下させることが改めて確認された。本研究では特に、自分の地元の話や将来の夢などのトピックの際、WTC が低下する傾向にあった。身近なように思えて説明が難しいものがあるので、WTC の向上を目指す場合には、トピックには最新の注意を払う必要がある。また、WTC が向上する理由として、対話者の存在が挙げられた。対話者に迷惑をかけたくないという理由で WTC が向上するのは、日本人英語学習者の特徴かも知れないが、相手からのフィードバックに左右される点は重要な結果であったと言える。英語を話す練習は教室内で良く行われるが、相手の発話にどう反応するかは、指導の中で以外と見落としがちである。この点については、WTC の向上を目指し、十分に指導を行いたい。最後に、WTC を低下させる不安にも様々なものがあることが確認された。一括した対策は難しいため、不安を感じる学習者にはできるだけ個別に接し、問題点を解決する必要がある。

このように、学習者の WTC は様々な要因で変化し、変化の様相も学習者によって異なる。WTC は一定ではなく、常に変動をすることを前提に研究を進め、教育現場にその成果を還元していく必要があると言えるだろう。

#### 参考文献

- Kang, S.-J. (2005). Dynamic emergence of situational willingness to communicate in a second language. *System*, 33(2), 277–292. <https://doi.org/10.1016/j.system.2004.10.004>
- Khajavy, G. H, MacIntyre, P. D., & Barabadi, E. (2018). Role of the emotions and classroom environment in willingness to communicate applying doubly latent multilevel analysis in second language acquisition research. *Studies in Second Language Acquisition*, 40, 605–624. <https://doi.org/gnxxcb>
- MacIntyre, P. D., & Legatto, J. J. (2011). A dynamic system approach to willingness to communicate: Developing an idiodynamic method to capture rapidly changing affect. *Applied Linguistics*, 32(2), 149–171. doi:10.1093/applin/amq037
- Ueki, M., & Takeuchi, O. (2016, August 22–24). *Are they two sides of a coin? Redefining the relationship of anxiety and self-efficacy in the Japanese EFL context* [Paper presentation]. Individuals in Contexts: Psychology of Language Learning 2. Jyväskylä, Finland.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Koga, T., Konno, K., & Sato, R.	4. 巻 50
2. 論文標題 Effects of instructional languages on development of willingness to communicate	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Konno, K., & Koga, T.	4. 巻 49
2. 論文標題 Exploring Antecedent Factors Affecting L2 WTC in Classrooms	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 317-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Konno, K., Koga, T., & Yamaguchi, A.	4. 巻 7
2. 論文標題 Effects of Pairing on the Relationships between Motivation and Task Performance in an Interactive Task	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in English Language Teaching	6. 最初と最後の頁 451-465
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22158/selt.v7n4p451	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Konno, K., & Koga, T.	4. 巻 52
2. 論文標題 Factors affecting WTC during a speaking task	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Sato, R., Kasahara, K., Tomita, F., Takano, H., Konno, K., & KOGA Tsutomu
2. 発表標題 Thinking About Effective and Motivating Teaching in a Japanese EFL Environment
3. 学会等名 中部地区英語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 K. Konno, A. Yamaguchi, & T. Koga
2. 発表標題 Examining relationships between EFL learners' WTC and communication behavior
3. 学会等名 FLEAT VII (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 K. Konno, A. Yamaguchi, T. Koga, & A. Tweed
2. 発表標題 Factors affecting fluctuations of EFL learners' situated WTC
3. 学会等名 The 58th JACET International Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 T. Koga, R. Sato, & K. Konno
2. 発表標題 Considering effective teaching methods from the viewpoint of Japanese EFL learner profiles
3. 学会等名 The 17th Asia TEFL International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koga, K., & Konno, K.
2. 発表標題 What makes learners good language learners? - Focus on motivational profiles of EFL learners -
3. 学会等名 16th Annual CamTESOL (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Koga, T., & Konno, K.
2. 発表標題 Roles of Japanese teachers and native teachers in the classroom: Changes in L2 self
3. 学会等名 第43回全国英語教育学会島根大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Koga, T., Konno, K., & Sato, R.
2. 発表標題 Variations in L2 self and WTC: Effects of teacher's nationality and instructional languages
3. 学会等名 New Trends in English Language Teaching and Testing (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山口 篤美  (Yamaguchi Atsumi)  (10749469)	名城大学・外国語学部・講師    (33919)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古賀 功  (Koga Tsutomu)  (90528754)	龍谷大学・先端理工学部・准教授    (34316)	
研究分担者	TWEED Andrew  (Tweed Andrew)  (30788823)	創価大学・ワールドランゲージセンター・講師    (32690)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関